

◎報告

呼吸器疾患の温泉療法 —地域医療と遠隔医療の比較—

西村 伸子, 寺崎 佳代, 山本 貞枝, 吉尾 慶子, 谷崎 勝朗¹⁾

岡山大学医学部付属病院三朝医療センター看護部

¹⁾同

内科

要旨:呼吸器疾患の温泉療法について、1999年～2001年の3年間に三朝医療センターに入院し、温泉療法を受けた気管支喘息と肺気腫症例を対象に、再入院率と症例数の変動、年齢、地域との関連について検討を加えた。

その結果、喘息では遠隔地（鳥取県外）からの症例（平均56.8%）が、また肺気腫では鳥取県内からの入院症例（平均58.7%）が多い傾向が見られた。再入院率は、喘息は30.1%、肺気腫が41.6%であり、喘息では遠隔地からの、また肺気腫では県内からの症例が増加する傾向であった。再入院率の年齢別検討では、喘息では50歳以上、肺気腫では70歳以上の症例で再入院率が高い傾向であった。平均入院期間は40日から60日間であり、初回入院より再入院症例の方が短期間であり、初回入院では喘息よりも肺気腫でより長い傾向であった。

はじめに

当三朝医療センターでは、従来より呼吸器疾患に対する温泉療法として温泉プール水泳訓練ないし歩行訓練・ヨードゾル吸入療法・鉱泥湿布療法を行っており、その結果、温泉療法には気道に対する直接効果と気道以外の臓器に対する間接効果がみられることが報告¹⁾されている。温泉療法を求めて遠く県外からの来院症例が多く、気管支喘息においては遠隔地からの症例が多いことが特徴的である。再入院においても気管支喘息、肺気腫とも県内症例に比べ県外症例の方が高い傾向²⁾である。そこで今回は、最近3年間に温泉療法を受けた気管支喘息と肺気腫症例を対象に、再入院率と症例数の変動、年齢、地域との関連について検討を加えた。

方 法

1999年から2001年の3年間に入院した呼吸器疾患のうち気管支喘息症例286例と肺気腫症例126例を対象に再入院率と症例数の変動、年齢、地域との関連を比較した。

結果と考察

1) 再入院率

喘息の再入院率は鳥取県内では97例中26例（26.8%）であり、県外では122例中40例（32.8%）であった。肺気腫は県内が55例中19例（34.5%）であり、県外は34例中18例（52.9%）であった。両疾患とも県外である遠隔地症例の再入院率が高いことが示された（図1）。年次別再入院の変動は、喘息においては、県内は1999年が31.0%、2000年

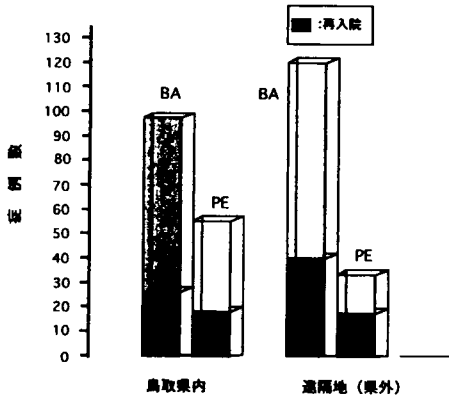


図1. 最近3年間に三朝分院に入院し加療した気管支喘息(BA)および肺気腫(PE)症例と再入院率

23.3%, 2001年22.2%とわずかながら減少しており、反面県外は29.5%, 31.9%, 38.7%と増加傾向になっている(図2)。県内症例が減少しているのは、

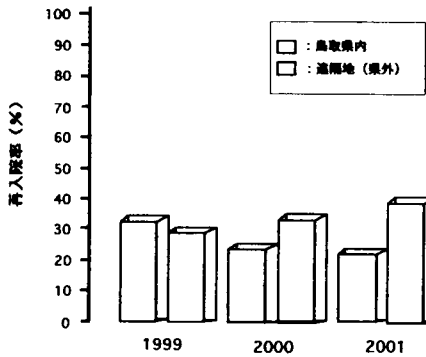


図2. 最近3年間に三朝分院に入院した喘息症例の再入院率

喘息日誌記入で体調チェックをすることにより変化に早く気づき、受診することで入院に至らなくなったこと、また、通院でプール治療を続行し体調コントロールが良好となっていること等が考えられる。県外症例が増加しているのは、昨年アンケート結果³⁾で当院に来院した理由に、症状のより改善と増悪予防のため温泉治療を求めて遠くからでも再入院していることが示されている。温泉治療の効果を感じて、当院での入院に満足が得られれば今後も増加すると考えられる。肺気腫の年次別再入院の変動は県内では順に28.6%, 26.3%, 53.3%と年次により増加しており、県外では77.8

%, 53.3%, 30.0%と減少傾向である(図3)。

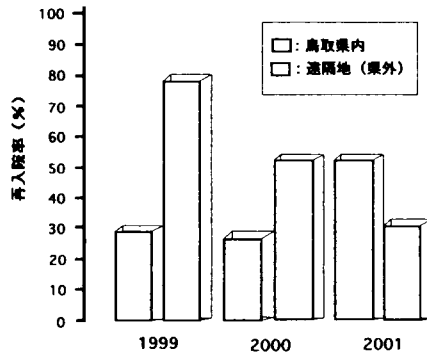


図3. 最近3年間に三朝分院に入院した肺気腫症例の再入院率

肺気腫の県外症例が減少しているのは、肺気腫症例は年齢層が高く遠隔地からの再入院は困難となることが考えられる。1999年の県外症例が77.8%と高くなっているのは一症例が5回の入退院を繰り返したためである。

2) 年齢別頻度

喘息においては多い年齢層として、県内では50歳代15.4%, 60歳代19.6%, 70歳代26.8%であり、県外では50歳代27.1%, 60歳代33.6%, 70歳代26.8%であった。喘息の年齢別頻度は県内外とも50歳以上が多い傾向であった(図4)。一方肺気腫は、県内では50歳代15.4%, 60歳代19.2%, 70歳

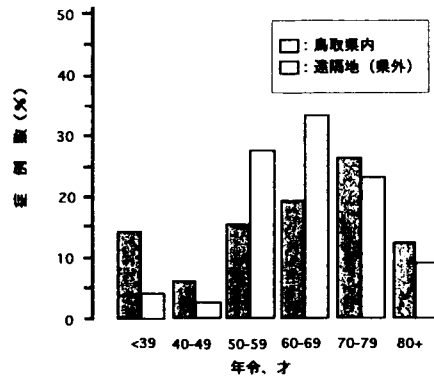


図4. 最近3年間に三朝分院に入院した喘息症例の年齢別頻度

代38.5%, 80歳代26.9%であり、県外では60歳代18.9%, 70歳代67.6%, 80歳代10.8%であった(図

5). 肺気腫の年齢別頻度は県内外とも70歳以上が多く、特に県外の70歳代は67.6%を占めていた。以上の結果は、1993年から1999年の7年間の入院症例999例と同じ傾向¹⁾であることが示された。

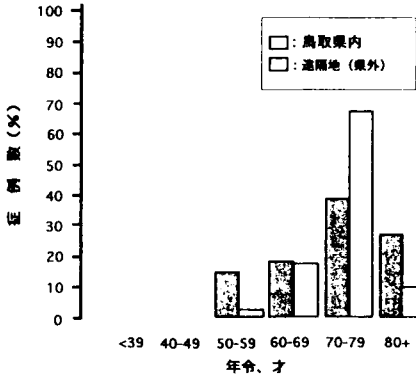


図5. 最近3年間に三朝分院に入院した肺気腫症例の年齢別頻度

3) 年齢別の再入院率

喘息の年齢別再入院率をみると県内は多い順に70歳代, 80歳代各々30.8%, 60歳代19.2%, 50歳代15.4%であり、県外は60歳代37.5%, 50歳代25.0%, 80歳代22.5%, 70歳代12.5%であった (図6)。

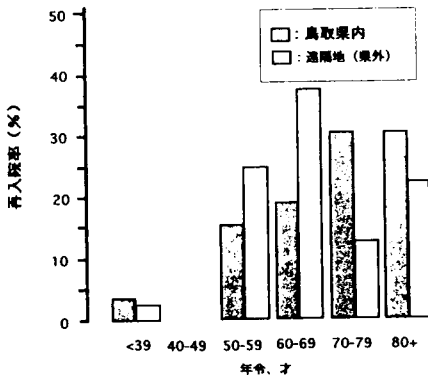


図6. 最近3年間に三朝分院に入院した喘息症例の年齢別の再入院率

喘息症例は、県内においては70歳代, 80歳代が多く、県外では50歳代, 60歳代が多く県外でより若年傾向であった。一方肺気腫は県内が70歳代41.2%, 80歳代52.9%, 50歳代5.9%であり、県外では70歳代が94.4%, 80歳代が5.6%であった (図7)。肺気腫症例の年齢別の再入院率は県内外と

も70歳以上がほとんどをしめていた。

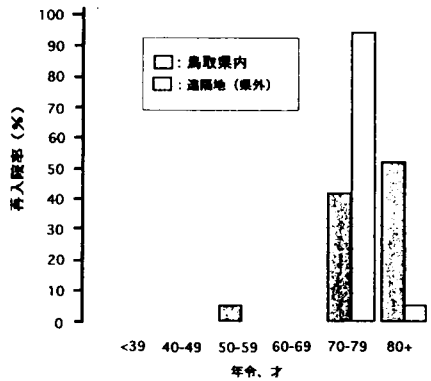


図7. 最近3年間に三朝分院に入院した肺気腫症例の年齢別再入院率

4) 平均入院期間

平均入院期間は両疾患、県内外とも40日から60日間であった。入院期間は各症例の病態、症状、治療方針により異なるところであるが、温泉治療の効果出現としてはアンケート結果⁵⁾によると1ヶ月半~2ヶ月の回答が多く、平均入院期間と一致する。喘息では県内の初回入院症例が平均46.3日、再入院症例が41.1日であり、県外では初回入院症例が62.4日、再入院症例が40.6日であった。肺気腫においては、県内の初回入院症例59.4日、再入院症例は40.2日であり、県外は初回入院症例が55.9日、再入院症例37.8日であった。両疾患とも初回入院より再入院時の入院期間のほうが短期間となっていた。この理由としては、初回入院で温泉治療の効果を感じて再入院しており、入院直後から積極的に治療に取り組み時間に無駄がないこと。また、予防的に、計画的に入院していることから入院期間が短縮されているものと考えられる。

結 語

当院の特徴として遠隔地からの来院症例が多いことは報告されており¹⁾、今回の結果でも遠隔地からの再入院率が高いことが示された。今後はIT化の影響もありさらに全国、また外国からの症例も増えてくるものと思われる。そのためには看護面でもさらに満足の得られるかわりを充実させ

ていく必要がある。一方地域医療においては、今年度4月から三朝医療センターとなり、地域連携室が開設されたことから今後は地域においても他施設にない当院の温泉治療を活かした治療で連携を深めていきたい。

参考文献

1. 谷崎勝朗：現代医療における温泉療法の意義とその社会的要請。岡山大学三朝分院研究報告63；110-116, 1992.
2. 谷崎勝朗，御船尚志，光延文裕，他：呼吸器疾患に対する温泉療法。最近7年間の入院症例99例を対象に。岡山大学三朝分院研究報告71；1-9, 2000
3. 西村伸子，寺崎佳代，山本貞枝，他：呼吸器疾患に対する温泉療法。再入院症例を中心に。岡山大学三朝分院研究報告72；80-83, 2002
4. 西村伸子，寺崎佳代，山本貞枝，他：アンケート調査による温泉療法の評価。遠隔地からの入院患者を対象に。岡山大学三朝分院研究報告71；84-88, 2000